

ボランティア・市民活動のコーディネーター・リーダー等推進者のための

2017  
No.478

# ボランティア情報

03  
Mar.

## 災害を自分ごとに落とし込み、つながりの輪を広げたい



岩手県

一般社団法人おらが大槌夢広場  
事務局長かみ たに み お  
神谷 未生 さん

東日本大震災の発災から今年で7年目を迎えた。今でも、多くの地域住民や団体、ボランティアによって様々な形で支援活動が続けられている。今号では、大きな被害を受けた岩手県大槌町を拠点に活動する一般社団法人おらが大槌夢広場（以下、おらが大槌夢広場）の神谷未生さんに、活動を通じて気づいたことと今後の展望についてお話を伺った。

おらが大槌夢広場は、震災が発生した2011年の11月に設立され、訪れた個人や企業に向けて語り部ガイドを中心とした震災学習を行っている。語り部ガイドを担うのは、実際に被災した町民や高校生であり、この活動はそれぞれの経験したことやそこから何を思うのかを訪

問者に語る活動である。ガイドを受ける訪問者は、実際の現場と語り部から聞くリアルな経験を知り、災害や人とのつながりを自分ごとに落とし込んでいく。一方、語り部は外部からの訪問者に「語る」ことによって、自分自身の考え方や感情が整理されていき、訪問者が自分の経験に耳を傾けてくれるため、生きることへの肯定感も生まれてくるという。

神谷さんは、この語り部の「語る」行為と外部からの訪問者の「聞く」行為の間のなかで、人と人同士のつながりが生まれ、そしてそれが今後の防災においても力を發揮することにつながっていくのではないかという。また、語りを通じて、災害や人と人同士の関係性を自分ごとに落とし込み、大槌町が学びの場としての地域になるように活動を継続していきたいと語ってくれた。そのためには、語り部ガイドのような仕掛けづくりを通して、人に対して「ありがとう」という言葉が当たり前に飛び交うような環境を増やしていくかないと課題も覗かせた。

### Contents

### 特集テーマ

### 地域のつながりを活かした「場づくり」

06 • 災害ボランティア  
このヒトに聞きたい！

07 • ボランティア温故知新  
～木谷先生の軌跡からボランティアのこれからを見据えて～  
・赤い羽根アラカルト

08 • 保険のひろば  
・ボランティア全国フォーラム2017  
・INFORMATION  
・事務局だより



# 地域のつながりを活かした「場づくり」

社会のなかの様々な場面におけるボランティア活動を通して、人はこれまで知らなかった人や団体、未知のもとの出会う。それは、活動者が人や団体とかかわることの楽しさ、未知のものへの新たな気づき・学びに出会うことができる、ボランティアならではの魅力といえる。

現在、ボランティア活動や市民活動が扱う課題は多様化している。そのため、自分ひとりや一団体だけで活動を実践するのではなく、他人や他団体と一緒に活動していく場や機会をつくりだすことが重要になってくる。

本特集では、出会った人や団体とのつながりを活かした場や機会をつくる事例を紹介しつつ、場づくりをきっかけに人や団体とつながることの重要性について一緒に考えていきたい。



社会福祉法人 志布志市社会福祉協議会  
福祉課長補佐  
ありまみつえ  
**有馬 美津枝 さん**

福祉課長  
わかまつたかひろ  
**若松 孝弘 さん**

## 鹿児島県・志布志市ボランティアセンター ってこんなとこ!

**名称**  
志布志市社会福祉協議会  
福祉課地域福祉係・ボランティア係

**開設**  
2006(平成18)年1月  
※志布志町、有明町、松山町の3町合併による市制施行にあわせて志布志市社協として開設

**職員体制**  
常勤:4名  
※ボランティア担当

**主な事業**  
・地域相互の自発的な助け合い活動の推進  
・ボランティア団体の活動推進・ネットワークづくり  
・福祉教育推進

**基本方針**  
志布志市と一体的に策定した地域福祉計画・地域福祉活動計画の基本目標の1つの柱である「誰もがふれあえる場とつくるために」を目標としている。

## 地域の有機的なネットワークをつくる

志布志市は鹿児島県の東部、大隅半島の中でも最も東側に位置し、宮崎県との県境にあります。人口は約3万人、高齢化率は32.8%になります。もともとは志布志町、有明町、松山町の3町に分かれしていましたが、平成18年に市制移行をして、志布志市となりました。

志布志市社協も3町の社協の合併により誕生していますので、今は本所と2カ所の支所があります。それぞれに地域福祉係を設置しています。そこに地域福祉係の他業務と兼務となります。ボランティア・コーディネーターとして、本所に職員1名と常勤臨時職員1名、支所ごとに常勤臨時職員1名の計4名を配置し、ボランティアセンターとして

活動をしています。

志布志市ボランティアセンターでは、これまで地域のボランティア団体同士をつなげたり、福祉施設等でボランティア活動を希望する団体への活動紹介を、各支所のボランティア・コーディネーターが個別に対応していました。

しかし、この方法では、どうしても社協にボランティア登録している団体や顔見知りの団体など、つなぐ先の選択肢が限られてしまいます。また地域の多様な関係者とつなげる役割を、各支所のボランティア・コーディネーターが個別に行っていることに非効率さを感じていました。

一方で、志布志市内には、市内のボランティア団体や個人の方が登録している志布志市ボランティア連絡協議会が平成25年度に立ち上っていましたし、市内のNPO法人も市の企画政策課がとりまとめ、NPO等連絡協議会が設置されました。

こうした地域に根ざしている活動団体やネットワークが多数ある中で、それらが一堂に会し、地域の中で有機的なネットワークや協働をつくっていくために考えたのが「協働笑談会」(以下、「笑談会」)です。

### 「商談」と「笑談」

「笑談会」を実施するにあたって気を

つけたことは、活動分野も福祉に限らず、環境や観光分野など、さまざまな分野の活動者に広く呼びかけること、できるだけ社協が事業として主導するのではなく、参加者同士が笑顔で自由に他の団体と話し、ここでの出会いを活動につなげていくための場とすることでした。

そこで、参加団体には事前に自身の活動や求めている活動、提供できる活動・連携などを資料として提出してもらいます。これを一つの冊子としてまとめることは社協のボランティアセンターが行いますが、「笑談会」当日は、いくつかの団体に活動や協働の実践事例を発表してもらった後は、「笑談会」に参加している団体別に簡易なブースを設け、自由に名刺交換や相談ができるプログラムとしました。

この取組みは平成27年度に初めて実施し、市内ボランティア団体や高齢者・子育てサロン団体、NPO法人、学校、行政、福祉施設、漁協や農協、生協、商工会などが参加しました。平成28年度は県内の他市や隣接する宮崎県の団体にも参加いただき、今後のネットワークや活動の広域化にもつながっていくと考えています。

地域の様々な団体がお互いの活動紹介と相手の活動理解をする機会を設定したことで、社協のボランティアセンターを介さなくとも、地域課題や活動目標を共有できる相手を探すことができる“商談”的場をつくることができました。

## 「笑談会」から生まれたさまざまな活動

この「笑談会」を通じて、実際に地域の団体がつながって、新しい活動が生まれています。

例えば、地元の介護付き有料老人ホームやグループホームを営む有限会社は、精神障害のある当事者の会と一緒に施設内の清掃ボランティアをしています。これは、清掃活動そのものを利用するのではなく、慣れない環境の中で精神に障害のある方が交流するのは難しいと考え、まずは清掃活動を通して



協働笑談会の風景

施設の雰囲気等に慣れてもらい、徐々に施設利用者との交流につなげていこうとする試みとなっています。

また、おもちゃや本などの子ども用品の物々交換を支援する「モノモノコウカンプロジェクト」は、これまで若いお母さんたちが中心になって活動をしていました。ここに「笑談会」で出会った地元の更生保護女性会や精神障害当事者の会に手伝ってもらえるようになったことで、運営側のボランティアを必要とする若いお母さん方と、地域で更生保護の活動していた方との世代間交流、障害当事者の方の居場所の役割も、この「モノモノコウカンプロジェクト」が果たすようになりました。

### まちづくりを目指して

志布志市の地域福祉計画・地域福祉活動計画の基本理念は「みんな笑がお！ 志あふれる 結のまち しぶし」です。

そのためには、地域住民が身近にボランティア活動に参加できる環境づくり、学校や地域における活動の場づくりを通してした福祉教育の推進、地域の課題を、ともに解決していく基盤づくりなどが必要となります。

この「笑談会」に参加した団体や活動も、もともと地域の中で社協のボランティアセンターなどが関わっていた団体です。それらが、「笑談会」という場を通して、新たな協働相手と出会い、つながりや活動を作り、居場所づくり、多世代交流の場となっていました。

ボランティアセンターが目指す活動も、地域に対して「普段から、困ったら社協ボラセンへ！」と親しみやすい関係をつくり、その中でニーズをキャッチし、地域の中でともに支えあう活動をつくっていくことであり、最終的にはまちづくりであると考えています。そして、そのことを実現する一つの取組みが「笑談会」だと考えています。



モノモノコウカンプロジェクトの活動風景



山口市市民活動支援センター さぼらんて  
センター長

わたなべ ようこ  
**渡邊 洋子**さん

### 「さぼらんて」ってこんなとこ!

#### 名称

山口市市民活動支援センター さぼらんて

#### 開設

2001(平成13)年12月

#### 職員体制

常勤:3名 非常勤:12名

#### 主な事業

- ・NPOマネジメント支援(セミナー、寄り添い相談、訪問支援)
- ・市民意識啓発事業
- ・拠点運営(相談、会議室貸出)

#### 基本方針

誰もが安心して心豊かに暮らせる山口市に向けて、自ら気づき、考え、行動していく市民及び市民活動団体それが描いている活動展開ができるように支援し、個性豊かで活力のある自立した山口市に貢献する。

#### 使命

- ・市民意識の啓発・参画の促進
- ・NPOの活動基盤の強化・自立支援
- ・新しい公共に向けての多様な主体とのパートナーシップの促進

#### 組織基盤

- ・官設民営
- ・平成28年度予算 23,837千円

## 連携・協働の背景

山口市では、2008年に山口市協働のまちづくり条例が交付され、協働推進プランが策定されました。このなかで、「協働によるまちづくり」また「総合的な地域づくり」の拠点として、各地域の公民館を「地域交流センター」にし、市内21ヶ所の中学校区を単位にこの地域交流センターを設置することにしました。

これを機に山口市では、行政が地域づくりのコーディネートや中間支援を自ら行うことになりました。しかし、結果

として行政だけで取り組みを推進するには限界があることが分かり、民間の市民活動支援センターの存在意義があらためて認識され始めました。

## 連携・協働の場づくり

さぼらんてでは、「円卓会議」という連携・協働の場づくりを設けています。これは、ボランティアや市民活動にかかわる多様な人材を集め、情報交換や意見交換を交わすことで、出席者のモチベーションを上げ、社会課題を解決するための連携や人材発掘を促すことを目的としています。会議で取り上げるテーマは、さぼらんての職員がニーズの把握やセミナーのアンケート回答、団体との連絡調整等を通じて把握したものを設定しています。

## 連携・協働という視点について

最初から連携・協働という形式をもって、事業を進めていくわけではありません。たしかに連携・協働が重要なことはよく言われますが、これはあくまでも地域にある社会課題を解決するための一つの方法だと思っています。それゆえ、連携・協働あるいは事業の実施ありきで運営していくのではなく、解決したい社会課題を明確にすることが重要だと考えています。また、そのためにどのような地域資源があるのかを把握することも重要なことだと思っています。

このため、さぼらんてでは解決したい社会課題を中心に据えた団体間のコーディネートを心がけています。また、社会と一緒に創造していくための団体間での役割分担が明確になるように、事前に関係者にヒアリングを行うようにしています。

とはいっても、連携・協働を図ることで、後述する「コドモジカンプロジェクト」のような成果を出すこともできました。実践を通して気づいたことは、地域のニーズを聞いていくこと、事業の実施ではなく、その目的を伝えること、地域の人に無理がないような実践にすることです。そし

て、事業が終わった後の情報発信やリフレクションをしっかりと行うこともまた連携・協働の推進には重要だと思っています。

## 連携・協働の実践～「コドモジカンプロジェクト」

山口市では、子どもの居場所に関する課題を解決したいというニーズが多くあったことから、さぼらんてでは子どもの課題を解決している市民活動団体7団体に声かけし、平成27年度前半に子どもの共育について考える「さぼカフェ(円卓会議)」を3回実施しました。

「さぼカフェ」を通じて団体どうして協議を重ねるごとに、子どもが子どもらしい時間を過ごせる空間が少なくなっていることがあらためて明らかとなりました。そこで、この課題を解決する実験的な試みとして、平成27年度に子どもたちの夏休みの10日間、市の小学生を対象として、「子どもが子どもらしい時間を過ごせるように」をテーマに、市民活動団体がそれぞれの特徴を活かした子どもの居場所づくりのプログラムを18件実施しました。このプロジェクトの協力団体は12団体、62名がボランティアとして参加、そして参加した小学生は185名にも上りました。参加した子どももプロジェクトを実施した市民活動団体の双方ともに感触で、双方が喜び、また地域の絆づくりにもつながる「コドモジカンプロジェクト」を地域に広げる必要性やその可能性は大きいことを確認できました。

また、プロジェクトを実施したままにせず、次につなげていくため、この実践のスケジュールやセオリーを、「あそびがまんなか“コドモジカンプロジェクト”のススメ」というA4判3つ折りのパンフレットにまとめるなどリフレクション(ふり返り)にも注力しました。これを、「地域のなかの子どもたちの居場所づくり」の実践事例として地域に1,000部配布して、プロジェクトの意義や効果を広く伝えました。その他、今年度は、地域で取り組んだプロジェクト当日の経過や様

「2017年全労済地域貢献助成事業」の応募が始まりました。

主催:全国労働者共済生活協同組合連合会 応募期間:平成29年3月22日(水)～4月5日(水)

詳細については、右記URLをご覧ください。 <http://www.zenrosai.coop/zenrosai/topics/2017/21547.html>

子を記録し、本会で発行している「さぼらんてかわら版」やDVD映像に取りまとめました。また、googleアンケートを使って参加小学生の保護者にアンケートをとったり、振り返り会をコーディネートして、地域で活動が継続・拡大するようフォローしました。



### 連携・協働した団体

- ・山口市協働推進課・社会教育課
- ・地域づくり協議会
- ・単位自治会・婦人会
- ・こども会
- ・市民団体
- ・企業

### 連携・協働の実践から見えた課題

このプロジェクトは、子どもにかかわるすべての課題をなくし、大人のまなざしが子どもに注がれる地域が当たり前になるようにしたいという想いからスタートしました。将来的には地域のコアな課題（子どもの貧困問題や独居の高齢者の支援等）にも対応できる方向へ展開していきたいと考えています。

NPO法人などが地域のなかに入り込んで活動するのは、連携・協働の視点も含めて、たしかにハードルが高いことだと思います。ですが、センター開設から15年程度が経過し、行政とパートナーとして事業を進められる基盤が

整ってきました。さばらんてとしては、行政のオーソライズを得ながら、これからも地域のなかに入りていきたいと考えています。地域コーディネーターを置くことを念頭に、平成29年度は、地域を限定し、子育て世代を巻きこんだ気軽な話し合いの場を設定していきたいと思います。

今後は、地域コーディネーターの育成や大学生ボランティアを活用した小・中・高生のボランティア体験の推進を図っていきたいと思っています。また、連携・協働の推進に向けて、地域課題の見える化のしくみづくりやNPOのファンドレイジングを推進する支援を行っていきたいと考えています。

当日の様子。紙飛行機を通して、子どもたちは大いに楽しみながら、大人と交流もしました。

プロジェクトに参加した子どもたちと大人の方々。この集合写真からも、子どもも大人も楽しかった様子がうかがえる。

入口近くの交流スペースを活かして、多くの市民団体が会議を開く。

センターの様子。入口に入ると、市民活動に関する情報や広報物が置かれている。写真中央部では、入口近くの交流スペースを活かして、作業が行われている。

# 災害ボランティア このヒトに聞きたい!



石井  
布紀子  
さん

さくらネット  
災害ボランティア活動支援プロジェクト会議  
幹事  
代表理事

## さまざまな思いを抱えながら奔走してきた阪神・淡路大震災での支援

2月号では災害ボランティア活動支援プロジェクト会議(以下「支援P」)や様々な団体との協働の考え方についてお話いただきました。3月号では石井さんご自身のお話を聞きたいと思います。

**石井** 私はもともと、学習課題のある子どもの個別支援、軽度の障害のある方の生活支援などの仕事に携っていました。1995年に発生した阪神・淡路大震災では、私自身も家と仕事を失ったのですが、地域の人たちや被災地支援に来られたボランティアのみなさんに支えられながら、約4年間、昼夜を問わず、さまざまな活動を行いました。高齢者や障害のある方、子どもなど災害時要援護者のニーズを受け、必要なプログラムを様々な団体と協力しながら開発するなど、とにかく、自分のできることをやれるだけやったというのが、被災地支援に関わる最初のきっかけです。

ご自身も被災されながら、それでも被災者支援のために活動を続けてきた原動力は何だったのでしょうか。

**石井** 4年間支援を続けていた中で、被災地支援から逃げ出てしまおうと思ったことが何度もありました。被災者の再建のメドがつきはじめた頃、当時の支援活動に資金支援をいただいていた方に相談したら「たくさん的人に支えてもらって生み出した経験を、このまま自分だけの財産にしてしまうのではなく、社会に還元していくべきだ。」と言われました。その時、言葉の意味は分かるけど、今それを言うのかという思い、逃げられない切なさを感じました。仮設住宅での活動に協力して下さった被災者の方が復興住宅で自殺されるという残念な出来事があり、無力感もありました。

そうした悲しい出来事を背負ったまま、被災者支援の現場に踏み止まり、前に進んでいたのは、多様な支援者の方が連携して被災者支援を行う中で生まれる力に励まされてきたからでしょう。そして、ボランティアに関わった人・支援を受けた人が共に前に進む力を得ていく過程を見続け、ボランティア活動は人に成熟する力を与えてくれるものであると理解し、活動を通して

普段の仕事も住む場所も異なる様々な方が集まって協力しながら運営される災害ボランティアセンター。これまで複数の被災地で災害ボランティア活動支援に携わってきた経験豊かな方々から被災地支援に関するようになった経緯や支援への想いを伺います。

地域や人が変わっていくことに可能性を感じたからだと思います。

その時の経験が、今の災害時要援護者支援や災害時にも強い平時からの福祉コミュニティづくりの活動につながっています。

## 地域と人の変化を大切に、コーディネートの重要性を実感

石井さんがさくらネットとして携わっている防災・減災やコミュニティづくりの活動について教えてください。

**石井** 阪神・淡路大震災以降、地域の中で生きづらさを抱えている人、またそういう人がいる地域が被災したとき、どうやって地域を応援することが出来るのかを考え続けています。初めての仮設住宅支援では、まず地域の人たちとニーズの可視化を行ってきました。その中で地区社協や市社協の方々と出会い、地域でのコーディネートの役割や地域福祉的な活動を知ると共に、その大切さや素晴らしさを教えてもらいました。

支援Pでの活動で現地にうかがう中で、地域活動や地域ケアシステムが充実していけば、地域の防災・減災力にもつながると確信し、各地で地域活動関係者・社協・福祉事業所などが集う協議の場づくり・研修・訓練等をお手伝いしています。

防災・減災教育の取り組みも継続しています。阪神・淡路大震災の経験と教訓を未来に向かって継承していくため、学校や地域で防災活動や教育に取り組む子どもや学生を表彰する「ぼうさい甲子園」の事務局として活動しています。将来に起こりうる災害に備え、学校などと連携しながら、自分の命を守るためにプログラムや教材の開発なども行っています。



誇らしげに表彰状を掲げる受賞者

支援Pの事務局としての活動も尽力していますが、さくらネットとしての私の活動の中心は、防災や減災のための教育支援や、地域福祉的な視点に立って、災害時にも強い地域コミュニティづくりを行うことであり、人や地域がより良い方向に変わっていくことが、そのミッションであると考えています。

その活動の一つとして、平成28年4月に発生した熊本地震においては、「みなみ阿蘇福祉救援ボランティアネットワーク」に参

加されています。その時のお話を聞かせてください。

**石井** 熊本地震では南阿蘇村の中心部に行く道路が寸断され、介護施設の職員が出勤できない状況や自宅被害による県外避難、退職など介護職員の人員不足がありました。一方で、特別養護老人ホームなどに入所されている方、一般的の避難所ではなく福祉避難所などでのケアを必要とする方、在宅避難者にもケアが必要な方が大勢いました。

災害ボランティアセンターが関わりにくく夜勤者派遣の希望もある中で、南阿蘇村を応援しようという団体と地元の事業所が連携しながら、「みなみ阿蘇福祉救援ボランティアネットワーク」として、4月30日から介護・看護職の専門職支援の派遣を開始しました。この取組みの中で大切にしていたのは、全国から来られる介護・看護の専門技能を有したボランティアの方々に対し、ただマッチングを行うのではなく、地域福祉の視点を持ちながら、地元の事業所が主体となって活動をコーディネートしていくことにありましたので、私たちはそのお手伝いをしていました。

現在、この取組みは終了し、地元の事業所が中心になって地域の復興が進められていますが、この取組みをきっかけとして、南阿蘇村での包括的な地域ケアシステムの構築に向けて地域の事業者が集まって話をする動きが始まりました。このことは、被災という経験を通して、あらためて地域のケアについて考えるための顔の見えるネットワークが必要だと理解されたのだと思っています。

こうした活動に取り組む中で、石井さんが大切にしていることを教えてください。

**石井** 私は、被災地域の住民、ボランティアや支援団体の方々が、被災地支援の中で出会って、ともに災害を乗り切ろうとする中で生まれる力、折り合うプロセスを大切にしたいと考えています。

その中で、コーディネートの専門性を現地の人とともに築き可視化したいです。自分の思いや考えとは異なった状況の中で、活動を支援し、調整するうちに、誰かと誰かがつながり、前に進むと感じています。

「厳しいなあ」と感じる時もあると思いますが、まずは自分の役割を活かして、課題や生きづらさを抱えた方々に寄り添う地域をめざしながら、知恵を出し合えたらと願っています。人や地域の変化を見つけるたびに喜んで、笑顔も忘れず前進し続けることが、被災者支援において大切なではないかと思っています。

ありがとうございました。



～木谷先生の軌跡からボランティアのこれからを見据えて～

## 一年間の連載を振り返って ～木谷さんのボランティア精神～

木谷さんはボランティアについて一貫した考え方、信念を持って取り組んできたという点では木谷さんを知る誰もが一致するだろう。ボランティアという言葉が日本に定着していない頃から、ボランティアの普及をすすめてきたのだが、その間に世の中のボランティアのとらえ方は大きく変わった。木谷さんがすすめた善意銀行、ボランティアセンターの広がりとともに、一部にあったボランティアを道徳的、慈善的ととらえる向きが変わり、コーディネーターなど支援者の存在も明確になり、福祉教育事業も受け入れられた。組織性を強めたボランティアも増え、NPO法が成立し、ときには、「ボランティア」と「NPO」の相違を声高に言う人も出た。このような動きは、木谷さんの考えるボランティアの枠を超

えてしまったのだろうか。

木谷さんは、実に多様な活動に取り組み、さらに多様な活動をしているボランティアに共感し、徹底的に付き合い、支援してきた。とくに長く一緒に仕事をしてきた鈴木廣子さん（元全国ボランティア活動振興センター副所長）は、「木谷さん、何でそんなところまで仕事を広げるの」と思い続けてきたに違いない。

全国ボランティア活動振興センターの設立時、「全国社会福祉協議会全体の理事会・評議員会とは別に、センターのあり方・事業を検討するための運営委員会が必要だ。それは、社協組織から少し張り出した存在である必要がある」と木谷さんは語っていた。その後、全社協では、ボランティアセンターは社協組織のフロント（前衛）だと位置づけるようになるが、これは木谷さんの考え方に対するところが大きい。ボランティアセンターは、常に新しい

動きと接し、支援しながら、新しい関係づくり、事業づくりをしていくということである。

木谷さんは、ボランティアは動機も、活動内容も方法も多様であるということを最初から喝破し、その多様性に対して「寛容」というよりは、それを全部包み込む理念を持っていたのではないだろうか。だから、多様で、一貫性があるのだと思う。

これが木谷さんが大切にし、広めてきたボランティアの考え方、精神ということだったのだろう。木谷さんの持っていたボランティア精神は素晴らしい、さらにそれをかたちにしたという成果に賛辞を贈ることで終わらせるのではなく、ボランティアという言葉に未来を切り開く力をいかに持たせていくかが、私たちの仕事であると感じている。

全国社会福祉協議会  
常務理事 渋谷 篤男



## 地域や社会の課題解決のための助成

共同募金会をはじめ、助成財団や企業などによる助成金はいわゆる「事業費助成」が主で、多くの場合、人件費や事務所家賃など運営にかかる経費は対象外になっています。これは、団体の運営に係る経費は流動的な助成金に頼らず固定財源を充てるべきという考え方と、寄付者の「人件費に使うなんてけしからん」という声に、寄付を助成財源とする共同募金会などが配慮していたという理由が考えられます。しかし今、こうした考え方方に少しずつ変化が生じてきています。

東日本大震災が起きた2011年、中央共同募金会には海外から多くの支援金が

中央共同募金会 企画広報部 副部長 山内 秀一郎さん  
阪神・淡路大震災のボランティア活動に関わった後、中央共同募金会入局。  
全社協 全国ボランティア活動振興センター（当時）への出向を経て、中央共募復帰後は、募金開発チーム立ち上げに関わり、主に企業への社会貢献活動のプログラム提案、米国のユナイテッドウェイ・ワールドワイドとの協働事業、遺贈・相続寄付等を担当。



寄せられましたが、資金の使い方について海外のドナーと協議をした時、ある印象的なやり取りがありました。「被災地の活動団体の運営やスタッフの人事費に使っても良いか？」と尋ねたところ、「もちろんOKだが、なぜそんなことを聞くのか？」と逆に質問されてしまったのです。

前回、「コミュニティ・インパクト」について触れましたが、日本の企業の中にも、助成金を出す際に費用を問わず、その活動によって生み出される成果を重視したプログラムを実施するものが出てきています。さらに、団体の活動基盤強化そのものを目的とした助成プログラムも多く生まれてきています。中央共同募金会が行う東日本大震災や熊本地震の「災害ボランティア・NPO活動サポート募金（通称：ボラサポ）」や「赤い羽根福祉基金」なども、活動に必要な

スタッフの人事費や団体の運営費への活用も認めています。

活動団体にとって使い勝手の良い助成は歓迎されることだと思いますが、一方で助成金による事業執行への責任が増すことや、はっきりした成果の明示が求められるなど、ご苦労も増えることになるかもしれません。共に地域や社会の課題を解決するためのパートナーとして、資金を提供する側と活動する側、そして地域がお互いにWin-Winの関係になるよう、これからもあるべき姿を模索していきたいと思います。

1年間、お付き合いいただき、ありがとうございました。

# 保険のひらば

ボランティア活動保険等の補償制度は、社会福祉協議会およびその構成員・会員ならびに社会福祉協議会が運営するボランティア・市民活動センターなどに登録されているボランティア・ボランティアグループ・団体が加入対象です。

## 平成29年度 ボランティア保険の加入手続きはお済みですか？

全社協の「ボランティア活動保険」「ボランティア行事用保険」「福祉サービス総合補償」「送迎サービス補償」など平成28年度のご加入契約は、すべて平成29年3月31日をもって補償期間が終了します。平成29年度の保険加入につきましては加入漏れのないように、お早めに最寄りの社会福祉協議会にて加入手続きを完了してください。



安全第一

### ボランティア活動の事故防止・軽減のための10大ポイント

#### 1. 体調が悪い時は決して無理をしないこと。

健康と体調は全ての基本です。体調が悪いときは活動を見合わせることも重要です。「無理をする」 = 「自らケガをしに行く」、「他人に迷惑をかける可能性がある」とこと認識しましょう。



#### 2. 情報収集(事前の安全確認と日常点検)をしましょう。

活動場所や活動内容、往復途上の交通状況などの情報収集は、参加される活動のリスクを事前に予知するための基本です。収集した情報は、事故の未然防止や軽減に大いに役立ちます。

#### 3. 活動に適した服装を！

活動される内容、季節、天候などを照らし合わせ、適した服装で活動することが事故防止の基本です。  
帽子→熱中症予防。履きなれた運動靴→動きやすく、転倒防止。  
軍手→切傷など軽微な事故の防止。

#### 4. 自宅を出てから帰るまでが活動です。焦らず、気を抜かないこと。

集合時間に遅れそうなときは、連絡の上、焦らずに活動場所に向かいましょう。焦ると周りが見えなくなります。また、活動を終えてもホッとして気を抜かないこと。帰り道での交通事故も多く発生しています。

#### 5. 活動前には準備運動、ストレッチ！

ボランティア活動はスポーツと同じです。急激に動くと思わぬケガがあります。ストレッチなどで体を十分にはぐし、あたためてから活動を開始しましょう。

#### 6. 責任者の説明にはしっかり耳を傾けること。

自分自身であらかじめ気づいていなかった危険を確認する機会です。事前の説明にはしっかりと耳を傾けましょう。また、勝手な思い込みや独断は禁物です。

#### 7. 疲れを感じたら遠慮せずに休憩を。 随時、水分補給をしましょう。

疲れたときは、注意力が散漫になり、慎重な活動ができなくなる可能性が高くなります。「疲れた」と実感する前に、「ちょっと疲れたな」と感じた時には、周囲の人に遠慮することなく休憩をとりましょう。

#### 8. 過信は禁物。 今自分にできることをあらかじめ認識しましょう。

「以前はこのくらいできたから今でも大丈夫」は危険です。今自分にできることを自ら認識して、他のボランティアの方々と協力して活動しましょう。このぐらいやつても大丈夫、といった自己判断、過信は禁物です。



#### 9. 特に足元には注意！(転倒事故の防止)

足元への注意は事故防止の基本です。実際に発生している事故全体の約70%は転倒事故です。屋内・屋外を問わず、足元には十分注意を払って転倒事故を未然に防ぎましょう。

#### 10. 周囲の方々と協力して、情報の共有を図りましょう。

ボランティア活動は他の活動参加者や利用者と協力して行うものであることを認識しましょう。(例えば、重いものは複数人で運ぶ、脚立に乗るなど足元が不安定な場合は支えてもらう、危険な場所の情報はお互いに共有する等々)活動中は、お互いに声を掛け合うことで、突然の危険を防止することにもつながります。

ボランティア活動保険等についてのお問合せは、株式会社 福祉保険サービスまでどうぞ。

TEL/03-3581-4667 FAX/03-3581-4763 URL <http://www.fukushihoken.co.jp>

## ボランティア全国フォーラム 2017 IN 備後圏域



尾道市は瀬戸内海のほぼ中央、広島県の東南部に位置し、近畿と九州、山陰と四国をむすぶ「瀬戸内海の十字路」として発展してきた温暖な港町です。

点在する寺院や坂道から眺める尾道水道の景色、その美しい街並みと情緒から、文学や映画の舞台に取り上げられてきました。尾道市と四国の島々を結ぶ「しまなみ海道」にはサイクリングを楽しむ観光客が多く訪れます。

最近では、尾道の景観を生かし、空き家をリノベーションしてカフェや店舗を立ち上げる移住者が多いのも特徴です。

今年度、尾道市ボランティア連絡協議会では、移住する人たちがどのような思いを持っているのかを知るため、尾道の街へ

執筆：尾道市社会福祉協議会

フィールドワークに出向きました。そこで新たなつながりをつくり、尾道の地域資源を再確認しました。

ボランティア全国フォーラムにお越しの際にはぜひ、古いものと新しいものが融合する尾道の魅力を感じてみてください。



フィールドワークの様子  
(平成28年9月12日)



尾道の街並み

### 事務局だより

梅の花が咲き始め、いよいよ春が来たように感じます。今年度の『ボランティア情報』では、ボランティアの原点を辿るコーナーや災害ボランティア、共同募金など様々な視点を織り交ぜた連載を行ってきました。連載などを通して、これからボランティア活動について読者のみなさんと一緒に考えられた一年になったのではないかと思います。来年度も『ボランティア情報』を引き続きよろしくお願いします。

(赤坂)